

# 私と超音波

## 本田伸行

寺元記念病院 画像診断センター長



### [略歴]

氏名: 本田伸行(ほんだ のぶゆき) 昭和31年 2月16日 生

現職: 寺元記念病院 画像診断センター センター長

学歴: 昭和49年 大阪府立高津高等学校 卒業

昭和51年 奈良県立医科大学 入学

昭和57年 奈良県立医科大学 卒業、放射線医学教室入局

職歴: 昭和57年 奈良県立医科大学 臨床研修医

昭和58年 日本生命済生会附属日生病院 臨床研修医・医員

昭和62年 奈良県立医科大学 放射線科助手

平成3年 済生会御所病院 放射線科医長

平成10年 医真会八尾総合病院 放射線科部長

平成18年 寺元記念病院 画像診断センター長

私は、1982年に奈良県立医科大学を卒業し、打田日出夫教授の放射線医学教室に入局しました。当時の打田先生は大阪大学から母校の奈良医大に移られたところで、教室全体が活気にあふれていました。研修医1年目は研究室で寝泊まりし、いったい何時寝ていたのだろうかと思うような生活でしたが、本当に楽しく、充実していたように思います。また、いくら忙しくても恋愛できるのが若さ所以か、研修医2年目で結婚することになりました。当時は、「新婚旅行に出かけるので仕事を休む」など考えられないことでしたので、正月休みを利用してハワイへ新婚旅行に出かけることにしました。もっとも、新婚旅行といっても、大阪市大放射線科の越智宏暢先生に紹介状を書いていただき、ハワイのクイーンズメディカルセンターの病院見学が最大の目的でした。せっかくの新婚旅行にまで仕事を持ち込み、新婦は寂しかったろうと、今でも申し訳なく思っています。金もなかったので、スーパーで食料を買ってホテルの一室で食事を済ませたのも、今となっては懐かしい思い出です。

研修医2年目からは日本生命済生会付属日生病院勤務を命じられ、生涯の師と仰ぐ横井 浩先生に出会うことになりました。「本田は結婚しそうなので、外の病院に出して、生活が成り立つようにしてやろう」という打田教授のご配慮があったこともずっと後で知りました。ちなみに、私の長男の名前は横井 浩先生の「浩」と、当時の日本超音波医学会理事長の秋田大学工学部、奥山大太郎先生の「太郎」を頂き、浩太郎と命名しました。

日生病院に赴任してまもなく、外科部長の横井先生は「超音波医学の大家で、超音波ガイド下穿刺術の日本における創始者」であることなどを知らされました。画像診断とIVRに燃えていた私としては、何があんでも日生病院在職中に超音波診断もマスターするぞ!と俄然ハッスルして、超音波検査部に入局したことは言うまでもありません。ところが、私のような研修2年目の若造など相手にされるはずもなく、最初の何ヶ月間かは超音波検査の見学をするだけの日が続きました。

人生の転機は突然に訪れます。横井先生主催の「大阪超音波研究会」は伝統ある研究会として現在は八尾徳洲会総合病院の松田康雄先生が代表世話人を務められています。当時の研究会は日生病院の講堂で開催されており、奈良医大の打田先生と大石先生が研究会当日に日生病院超音波検査部を訪ねられ、「本田をよろしく」といったお願いを横井先生にして下さいました。奈良医大のお二人の教授の依頼ということで、ようやく、探触子を握らせていただくことができました。「君もやってみるか」と初めて声をかけていただいたときの感激は今でも忘れることができません。その時は舞い上がってしまって、肝左葉外側区域の3cmほどもある肝細胞癌を見落とししてしまいました。横井先生にバトンタッチしたとたんに、モザイク状の腫瘍が描出され、「HCCがあるね。」とのご指摘をいただき、冷汗三斗で私の超音波人生がスタートしました。

こうして私が超音波診断に関わるようになった1980年代は、超音波診断がようやく認知され、普及しつつあった時期です。そもそも超音波は体内のこういった構造物から跳ね返ってくるのかすら未解明のことが多く、次から次に研究テーマを与えていただきました。切除標本などを片っ端から水槽内で走査して断面肉眼像や病理組織像と対比する水槽実験にも熱中しました。写真は胃の切除標本を水槽内で走査し、胃壁の層構造の解明に取り組んでいた時のものです。現在も、「研究の進捗状況は？ 乳癌の自動走査システムの仕事は進んでいるのか?!」などと叱咤激励を受け、恐縮しています。

「この人のようになりたい!」というロールモデルを見つけることができればおのずと努力目標が定まります。そういった意味では、私は多くの先輩、恩師に恵まれ、順調に歩んでこられたと感謝しています。私を育ててくれた超音波医学に恩返しをしなければならない、と思う年齢にもなりました。

